

ラオスという国で出会った子どもたち

小林 美実

似ている、なんて似ているの。そっくり！ ラオスの首都ビエンチャンの子どもの図書館で初めて会った子どもたちの中に、日本の子どもそっくりの顔を何人も見つけた。今まで訪れたアジアのどの国よりも私たちに似ている。大人もそうだ。私は自分の先祖はラオスから来た、と確信してしまった。何

だかなつかしく、また、不思議な気持ちになった。ところで、ラオスと言う国については、日本ではまだ旅行する人が少なく、実情が知られていない。かの有名な旅行案内書の『地球の歩き方』でさえ、初版が今年六月にやっと出たのだ。この本にも外務省の「注意喚起」の文があつて、今回八月の人形劇

公演に際しても、手配を頼んだ旅行社からも「乗らない方がよい、という国内線の飛行機に乗らないわけでもないし」と言われてしまった。と言つて陸路は強盗集団が出没する。おっかないけど、空を飛ばうと決心する。ところが出発直前に、又、首都の市場で爆弾テロ。覚悟しての出発だった。

ところが訪ねてみると、実にのんびり、ゆったり、時間までゆっくり過ぎて行く国だった。人々はおだやかで親切。特に笑顔が良い。ラオスの仏像のやさしい表情に似ている。しかし経済的に発展しているタイのバンコクからこの地に入ると、ヴィエンチャンは首都だと言うのに、黄土色の土ぼこりにまみれた貧しい街や服装等におどろかされる。三、四階以上のビルは稀で、中心街の道路も、舗装がしてあるのか、こわれたのか、よくわからないガタガタ道である。ちよつと車で走れば、すぐ水田や畑、荒

地。三十年前のマレー半島やタイの田舎が思い出された。

先ず訪れたのは国立図書館の子ども図書館だった。国立と言つても、古い木造の二階建の、昔の学校か役場の様な所。その横の溝にそつた細道をぬけて後にまわると、平屋の木造家屋がある。これが子どもの図書館だ。辺りには民家もあるが、どれもトタン屋根、板をうちつけた壁、凸凹の土間と言う粗末な家だ。鶏があたりをかけまわっている。でも子どもたちは人なつっこく元気だ。私たちを見ると、どンドン出て来て、皆いっしょに仲良く写真におさまった。その嬉しそうな顔顔……。何て素直なんだろう。貧しさなんか吹きとんでいる様だ。

ここでとても嬉しいことがあった。建物の横に「T市子ども移動図書館」と日本語で書いてある古いバスが停っていた。舞台設営後でいっしょに来た



▲手遊びをする子どもたち ビエンチャンの「ラオスの子どもに絵本を送る会」の図書室で

T市の公務員のY氏が「あった、まだ動いているんだ！」と喜びの声をあげて車体をなでた。十数年前、市に立派な図書館が出来て不用になったこのバスを、大変な苦勞（各役所や団体の諒承を得るのに）の末、プレゼントしたものとかが。他にも六十一台、中部の地方市のバスもあった。日本で簡単にスクラップにしてしまうものが、こうしてお役に立っている。もっと沢山の物が日本では捨てられている。こうして生かされている姿を見ると、嬉しいだけでなく、反省させられる。

図書館と言っても、二十畳位の部屋。粗末な書棚や書架、座卓が雑然と置いてある。隅の一角がスタッフの場所で、そこにはTVとビデオの設備があった。まだ公演までに二時間もあると言うのに、幼児や小学生位のシン（巻きスカート）をまいた子どもが十人位座って待っていた。まず室内を片付

け、清掃、そして舞台設営を始めるのを、珍しそうに静かに見ている。だんだん子どもが増えてくる。見るからにイタズラツ子らしい元気な男の子も入って来て、さっそく体をくつつけあいふざけて笑いあっている。日本で少なくなった「じゃれあう」遊びである。公演が始まると、本当に素直に、嬉しさを表情と体いっぱいにあふれる様に表す。真剣にみつめたり、声をあげて笑ったり答えたり、一緒に歌ったり、反応が豊かだ。目が大きくキラキラしている。歯が真白だ。どの子ども体が見えてくる。

次は、日本の「ラオスの子どもに絵本を送る会（ASPB）」の現地事務所にある図書室での公演だった。前の場所よりやや広い部屋だが、中央に柱があり、多少見にくいかと心配したが、子どもたちは頭や体を左右に動かしながらも、一生懸命見てくれた。ここには日本からの絵本が沢山あり、ラオス



▲メンバーと一緒に踊る子どもたち ルアンパバーンの子ども文化センターで

語に訳された紙が貼つてある。日本からも時々スタッフが来られ、現地のスタッフと共同で、大変熱心に活動されていることがうかがわれた。

ヴィエンチャンでは珍しい立派な三階建の「青年の城」でも公演した。旧ソ連時代に社会主義国のあちらこちらにあった「子どもの宮殿」の様なものらしい。小学生から青年期までの青少年が集り、学校とは別に、学んだり運動をしている。ここでもサッカーと柔道は人気の様だった。唯一、整ったステージでの公演で、子どもたちの年齢も、小学生中学生が大部分だった。それでも本当に素直に喜んでくれた。

その朝、世界文化遺産に登録された寺の町、ルアンパバーンへ飛んだ。メコン川にそった山あい小さい静かな町は緑が美しく、土ほこりにはまみれていなかった。いたる所に寺があり、朝六時には、あ

ちらこちらの寺から、だいたい色の僧衣をまとい、はだしに黒い鉢を手にした僧侶の列が静々と歩み出て来る。朝靄の中、道端にひざまづいて座る女たちから、一日の食物の喜捨をうける。その僧侶の中には、小学生位の子どももいる。一時期、仏教が否定された時代があり、それによって仏教精神は相当失われた、ときいたが、私たちの目から見ると、まだまだ立派に存続している様に感じた。

今は、仏門に入ること、年齢も、期間も、相当自由らしい。しかしその修業は大変厳しいようだ。お金は一切持たず、物は支給される僧衣、袈裟、傘、鉢、サンダル位のもの。食事も、夜明けの托鉢で得たものを、朝と昼二回だけで、その日は水も飲めない。物欲にまみれた今の日本人には、とても耐えられない生活だ。ここの子ども文化センター（とにかく粗末な長屋風の建物。ここは子どもたちがと

び歩くので、土ぼこりだった)で公演した時、頭をすってまる坊主にした中学生位の男の子がいた。どうしても人形がやった手品を一つでいいから教えてくれ、と言って、懸命に練習していた。彼は寺の修業を終えたばかりとのこと。寺で修業したことを誇りに思っているらしく、そのことを私たちが知ったとわかると、嬉しそうになづきながら、真剣な顔つきをした。生きること自信を持ったのだろうか。

文化センターでは、小、中学生による人形劇サークルがあり、その劇を私たちに見せてくれた。人形もストーリーも音楽も、すべてこの地に伝承されているものの通りとのこと。それを大変誇りに思っている様だった。年齢の高い子どもや大人は真剣にみていた。ここから幼児や低年齢児童のための、子ども文化としての人形劇を創り出すためには、まだまだ



▲人形劇をする子どもたち ルアンババーンの子ども文化センターで

だ時間がかるだろうし、そのためには、多くのその分野の情報を得る必要もあるだろう。但しその時は、この町の、この国の、持ち続けている静かなゆつたりした生活がくずれる時かもしれない。社会主義と仏教が共存している、この珍しい国の将来を複雑な気持ちで描いてみた。

町の中央にある仙人伝説の山、プーシーのふもとに、周辺の山岳地帯に住むモン族が、毎日市場を出している。タイなどの産物として知られる、黒い布に美しい色の布切れや糸でかざった小さいバッグなどが売られている。ここで小学生位の小さい女の子が、竹を組んで作った床に座ってせせせと針を動かす、品物を作っている姿があった。社会主義体制の中で全国に学校は建ったが、実際にはどこでも学校に通わない子、途中で止めて家事を手伝ったり働いたりしている子どもが多いとのことである。大学進

学や留学するなどは、ごく限られた一部の人たちにだけ可能なのだ。

最終日、クアンシーの滝を見物に行った。この滝は、さまざまな形に浸蝕された岩壁（石灰岩）を激しく流れ落ちる水のように、思わず歓声をあげた程、迫力といい、雄大な美しさといい、すばらしかった。他に見物客も無いことも幸いだった。ここまで一時間余の山道は、国道と言うにはお粗末な、ガタガタの狭いじり道。途中、美しい棚田をいくつも見た。そして小さい集落も通った。しかし、途中から電柱がなくなり、どの集落も電気が来ていないことに気づいた。少し大きい平屋は小学校らしい。夕方の学校には、人の気配は感じられなかった。

帰り道、少し薄暗くなった山道で、農器具や作物をかついだ夫婦に何組か出会った。幼い子が、夫婦のまわりを先になったり後になったりして歩き、そ



▲みやげ屋で品物をつくる子ども ルアンパバーンのモン族の市場で

れに声をかけている若い母親の姿が印象的だった。わんぱく坊主の五、六人の群（？）にも会った。棒をふりまわしながら、家の方へ元氣にかけて行った。昔、私が子どもの頃、東京の中野あたりでも見られた風景である。なつかしく思い出していた。

貧しいけど、幸せであるのだろう。ラオスは暑い国。だから、衣と住は最低限あればいいのだろう。食は自給自足。しかしやがて清潔で快適で、豊かで便利な生活を知った時、皆がそれを望み、生活が変わった時、その時、子どもたちの目の輝き、歯の白さ、素直な気持ち、素朴な明るい心などが失われてしまうとしたら、残念なことである。子どもたちの姿から、生き方、幸せなどについて考えさせられることの多いラオスの旅だった。

（鶴見大学短期大学部）